

---

# 船大工

坂田火魯志

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

船大工

### 【Nコード】

N9635C

### 【作者名】

坂田火魯志

### 【あらすじ】

十七世紀オランダ。ここに非常に胡散臭い船大工がいるが彼は何とロシア皇帝ピョートル、彼の周りで起こる大騒動、歴史コメディーです。ピョートル大帝の伝説を小説にしました。ロルツウングという人のオペラが原典です。

## 第一章

船大工

十七世紀の欧州。この時代に一人の有名人がいた。

「本当なのですか、それは」

「ええ、それが困ったことに」

人々は顔を顰めてそう話し合う。この時欧州の東の果てに一つの国が急に出て来ていた。

正確に言つと以前からその国はあつたのだが彼等から見れば急に出て来たのである。その国の名はロシアという。多くの者にとっては聞いたこともない国であつた。

「ロシアといえば」

「一体どんな国なのやら」

「ほら、あれです」

誰かが言う。

「あの寒い国です」

「というとスウェーデンのことですか」

当時このスウェーデンは軍の強い人口が少ないながら強国として知られていた。欧州の者達は寒い国と聞いてこの国を思い出したのである。

「いや、それが違うのです」

「そうでもない」と誰かが言った。

「あの国ではありません」

「ではノルウェーで？」

「それともデンマーク」

「そのどちらでもありません」

両方共否定されてしまった。

「どちらでも」

「ではどの国なのか」

「デンマークでもなさそうですね」

「ブランデンブルグの隣です」

所謂プロイセンのことである。といってもそのプロイセンが有名になるのはもう少し後のことである。この時代は神聖ローマ帝国の中の国家の一つでしかなかった。

「そこにあります」

「ポーランドの向こうですな」

「左様です」

ようやく話が動いた。

「そこにある国です」

「寒い国ですか」

「そう、そして途方もなく広い」

その広さについても言及される。またその広さが欧州の者達にとつては衝撃的なものであった。

「噂によれば遠く中国にまで達しているとか」

「中国までですか」

「はい、本当に途方もない広さだそうです」

「そんな国があったとは」

人々はあらためて驚く。何時の間にそんな国が生まれていたのかと。

「かつてはイワン雷帝がいました」

「またたいそうな名前ですな」

この人物は皇帝の権限を瞬く間に強化し反対する者を容赦なく肅清したことで知られている。実はロシアを巨大にしたのは彼の東方進出によるものだ。上等の黒テンの毛皮と不凍港を欲してのことだと言われている。コサツクのイェルマークの活躍もありロシアは瞬く間に世界で最も巨大な国家となったのである。

「彼が広くしたそうですね」

「してその雷帝は」

「どうなったのですか？」

「随分前に亡くなりました」

この時代においてはもう大昔になっている。雷帝が死んだ後ロシアは大揉めに揉めた。さつきちらりと名前が出たポーランドが偽の皇帝を送ったりして介入もしたので騒ぎはかなり陰惨なものとなっていたりもした。結果として多くの人間が死んでいる。

「少なくとも今はいません」

「それではですな」

そうなれば問いの方向が変わるのは自明の理であった。そしてその問いの内容は。

「今のロシアの主は一体」

「誰なのでしょうが」

「ピーターというらしいです」

「ピーターでしょうか」

聞きなれないようできて何処かで聞いたことのある名前であった。

「左様、ロシアの読み方ではピョートルというそうです」

「ふむ、ピョートル帝ですか」

「してどのような御仁でしょうか」

「それがですな」

ここで彼について話す者は一様にして顔を顰めるのであった。何か話したらまずいことでもあるようにである。それがはっきりと顔に出していたのだ。

「どうにも破天荒な御仁でありまして」

「破天荒などは」

「はい。何か興味を持つものがあれば」

「ふむ」

「自分で身に着けないと気が済まないそうです」

「それはどういことですかな」

それを聞いてもどういことかわからない者もいる。それで尋ねると。

「あれです。銃を自分で撃ち」

「王がですか」

「いえ、皇帝です」

これにも訂正が入った。

「皇帝ですか」

「ロシアは自分達をビザンツの後継者を任じていますので」

「ああ、それでですか」

「成程、神聖ローマ帝国と同じですな」

「はい」

神聖ローマ帝国は西ローマ帝国の後継国家とされていた。そうした意味でこのロシア帝国は東ローマ帝国なのである。少なくともロシアの主張ではそうなのだ。

「しかし皇帝が自ら銃を」

「それだけではありません」

しかもまた訂正が入った。

「大砲も自分から撃ちます」

「大砲までですか」

「他にはボートを自分で漕いだり木を切ったり」

「またそれは」

それを聞いて驚かない者はいなかった。確かに武術もまた貴族、君主としての嗜みだが銃となると少し違う。ましてや大砲を撃つなどとは。流石にこれには驚いたのである。

「随分と変わった皇帝陛下ですな」

「何ともはや」

「それでロシアでは何かと騒動を起こしているようです」

皇帝についてはこれが何かと有名であった。

「そしてですな」

「まだありますか」

「ええ。これは噂ですが」

言葉が少し小さくなる。まるで内緒話をするかのように。

「何でもオランダにお忍びで来ているそうです」

「オランダに!？」

「それが何故かはわかりません」

そう前置きがされる。そしてまた言われる。

「ただ。噂でしかないのです」

「しかし一国の皇帝が何故オランダに」

「また訳がわかりません」

「何でも西欧の優れたものを学びたがっているそうです」

こう言われた。

「ロシアとしましては。まだまだ未開発らしくて」

「そうなのですか」

「確かにオランダは何かと進んでいますからな」

かなり以前からフランドルやネーデルラントといった辺りは商業が盛んで欧州では経済の先進地域であった。ここを巡ってハプスブルク家とヴァロア家も長い間争ってきたしカトリックとプロテスタントの激しい抗争もあった。何かと物騒になり易い場所でもある。

「やはりそこになりますか」

「ただ。何処にいるかまではわかりません」

こう言われた。

## 第二章

「今のところ本当に噂でしかないですし」

「ロシア政府は何と言っていますか？」

皇帝がいるロシア政府について言われた。肝心の当局である。

「彼等は」

「全く何も」

それはすぐに否定されるものであった。

「言いはしません」

「まあそうでしょうな」

これはすぐに納得がいったことであつた。

「彼等とて愚かではありませんまい」

「わざわざ自分達でそんな話を言いはしませんな」

そう言い合つて自分達で納得する。

「ただ」

「そうですね」

しかしそれでも言うのであつた。彼等の間で。

「噂ではないかも知れませんが」

「そうですね。そうであれば」

声も顔も笑いだしていた。まるでそこに楽しみがあるように。

「面白いことになりますな」

「さて、ピョートル帝」

渦中の人物について言及が為される。

「どういった行動に出ているのか」

「実に楽しみであります」

そんな話が為されていた。しかし詳細は今のところは誰も知りはないのであつた。

オランダの港街ザールダム。ここの酒場にやけに大柄でキザな感じに髭を整えた男がいた。男は船大工のラフな服を着て威勢良く肉

を食べ酒を飲んでいた。そうして周りにいる仲間達と楽しくやっていた。

「ほお、そうやるのか」

仲間の一人から説明を受けてやけに関心していた。

「歯を引っこ抜くのはそうだな」

「ああ、思い切り力を入れてな」

「わかった」

男は仲間の説明を聞いて納得して笑っていた。

「引っこ抜くのか。思ったより簡単だな」

「ああ。しかしあんたも変わってるな」

仲間はその男に言う。

「わしがか？」

「ああ。歯の抜き方を知りたいなんてな」

「他に骨接ぎも勉強していたよな」

「面白いからな」

彼は笑って仲間達に述べる。

「だからだ。身に着けなくなった」

「そういえばあんた興味のあるものは何でも自分でするよな」

「ああ」

ビールを腹の中に流し込んでから答える。

「まずは自分で身に着けてだな。何でも」

「また凄いね、それは」

「じゃあこの船大工もか」

「わしは船が好きなんだ」

手づかみで焼肉を食い干切っている。その姿は荒くれ者の多い船大工達の中でもとりわけ荒っぽい。しかしどういっわけか妙な気品も感じられた。

「だからな。どんなものか知りたくてな」

「またそれは」

「いやあ、実に面白い」

太い腕を振り回して言う。丸太そっくりの腕だ。

「病み付きになる、これは」

「そんなに喜んでもらって何よりだ」

「そういやペーターさんよ」

「うむ」

男の名前が呼ばれた。

「そういえばあんた生まれはロシアだったよな」

「ああ、そうだぞ」

彼は仲間の問いに答える。

「ここよりもずっとずっと寒い国だ」

「オランダよりもか」

「海が凍るのだ」

そう彼等に説明する。

「どうだ、凄いだろっ」

「いや、何度聞いても」

オランダの船大工達はそれを聞いて驚きを隠せない。彼等の世界では海が凍るなぞ考えられない、想像の範囲の外だからだ。これがまず驚きだった。

「寒い国だよ、ロシアは」

「それで男達はあれか」

今度はロシアの男達についての話だった。

「皆あんたみたいにでかくて」

「ああ、わしは特別でかい」

彼は笑って自分の身体のことを説明する。確かに異様に大きい。

「けれどもまあ皆でかいな」

「で、髭は」

「ここに最初に来た時のわしみたにな」

自分の奇麗に切り揃えられた髭をしゃくりながら述べる。髪の毛の色と同じで異様なまでに黒々としている。しかも剛毛であった。「長く伸ばしているのだ」

「何か今時珍しいね」

オランダの船大工達はそれを聞いて目を丸くさせる。

「そんなに髭を伸ばすなんて」

「寒いからかね、やっぱり」

「まあそうだな」

笑顔で仲間達にまた説明する。

「しかし。それも時代遅れかも知れないな」

説明しながらふと呟く。

「国に帰ったら。いつそのこと切らしてみるか」

「切らすって？」

「あつ、何でもない」

仲間の問いに誤魔化して返す。

「気にしないでいいからな」

「そうか。それじゃあ」

「で、女も髭が生えるのか」

「これかな。生えるんだ」

ここで困った顔を作る。

「オランダでは髭を生やした女はいないのだな」

「いや、それはないな」

「うちは不細工な女が多いとはいうが」

「ははは、ロシアの女はいいぞ」

自国の女の自慢に入った。

「大柄で美人でしかも気立てがきく」

「髭以外はいいんだな」

「ロシア女は最高だ。しかし」

「しかし？」

「酒の優劣は難しいな」

そう述べながらビールを流し込む。まるで鯨のように飲み干していく。

「いや、幾ら飲んでもな。わからんな」

「それにしてもあんた飲むねえ」

「いつもいつも」

「ロシアでは酒を飲まないで死ぬ」

本当のことだ。寒くて飲まないでやっではいけないのだ。ロシアではかなりの飢饉でも農民はまだ耐えるが酒がなくなると暴れるとまで言われている。

「だからわしは生きる為に飲むのだ」

「そうだな。じゃあ」

「うむ」

皆で木の杯を高々と掲げる。そして言うのは。

### 第三章

「ペーターの旦那に乾杯！」

「オランダの酒に乾杯！」

そう言い合つてまた飲みだす。このペーターという男は完全に船大工になっていた。

皆でそうやって飲んでいると。黄色がかつた金髪に水色の目をした若い男がやつて来た。彼もやけに大柄でしかも毛深い。ペーターの腕の毛と同じ位だ。

「なああんた」

「おお、ペーター！イワノフか」

男は彼の姿を見て楽しげに声をかけてきた。

「あんたも楽しくやつてるか？」

「いや、今日はちょっと」

しかしイワノフはその問いにはバツの悪い顔で応えた。

「あまりな」

「何か事情があるのかい？」

「残念だけれどある」

そうペーターに述べる。

「あんたもロシア生まれなんだよな」

「ああ、そうだ」

ペーターはまだ酒を飲みながら答えた。

「さつき話した通りな」

「じゃあ俺と同じなんだよな」

イワノフはそこを強調してきた。

「わかるよな、俺がロシア人だつていうのは」

「勿論」

ペーターは大きく頷いて応えてきた。

「その名前と喋り方だけでな。すぐにわかる」

「そうか。じゃあ話が早い」

イワノフはそう言われてさらに話を滑らかにさせてきた。そうしてまた言うのだった。

「最近この市長が五月蠅いから気をつけるよ」

「五月蠅い？何に？」

「何か不審者を探しているらしい」

イワノフはこう述べる。

「素性の知れない奴がいるかどうか探しているそうだ」

「そんなの港に行けば幾らでもいるだろうに」

ペーターはそれを聞いてすぐに首を傾げさせた。そのうえで言葉だった。当時の船乗りは港で集まってそのままということが多かったので得体の知れない荒くれ者も多かったのだ。何を隠そうペーターもそうとしか見えはしない。ロシア人とわかるだけで。

「また変なことをするな」

「それでもだ。お互い注意しような」

「お互い!？」

またイワノフの言葉に目を丸くさせる。

「どういうことだい、お互いつてというのは」

「あんたも俺と同じなんだろ？」

イワノフはそう彼に尋ねてきた。

「だから。言ってるんだけれどな」

「あんたは以前は何をやっていたんだ？」

「偉そうなことは言えないがな」

「ああ」

それに応えながら話を聞き続ける。

「俺は脱走兵なんだよ」

「そうだったのか」

「ああ、内緒だぞ」

ペーターが何者なのか特に考えずに言葉を続ける。

「それにあんたもそうなんだろ？」

「わしが？」

自分の左手で自分を指出して言う。

「脱走兵だと？」

「そうなんだろう？それでわざわざここまで逃げて」

「まあそんなところか」

自分でもそれを否定しようとしないう。何か否定できないものがあるようだった。

「わしもまあそうだな」

「ほらな、だからなんだよ」

イワノフはさらに述べる。

「俺もあんたも注意しようぜ。下手をすれば本国に強制送還だ」

「それはな。あるな」

ペーターもその言葉に頷く。

「わしも気をつけていくか」

「そういうことさ。もっともあの市長は結構抜けてるけれどな」

「確かにな。あの市長は」

ペーターも言うところを見ると本当に結構抜けている市長のようである。何かと抜け目のない商人国家であるオランダでもそうした人間はいるのだ。

「抜けているな」

「けれどまあ用心して」

「うむ」

またイワノフの言葉に頷く。

「それではな」

「用心に用心を重ねて」

そんなことを話していると赤毛で栗色の瞳の女の子が酒場にやって来た。小柄で青と白の上着とスカートを着てか鬼がそばかすがある。そのそばかすが可愛い。

「ペーター、そこにいたのね」

「どっちのだい？」

「お髭のない方よ」

そうペーターに応えて笑みを浮かべる。

「ペーター、イワノフに用があるのだけれど」

「僕にかい？マリー」

「ええ」

マリーと呼ばれた少女は彼に伝えてにこりと笑ってみせてきた。

「そうよ。実はここに来るまでに何か変な人を一杯見たし」

「変な人！？君の叔父さんだけじゃなくて」

実は彼女はその市長の姪なのである。彼女にとっても叔父はかなり抜けているどうにもこうにも変てこりんな人物なのである。それでも市長なのだからある意味凄いことである。

「他に誰が」

「フランス人もいたわ」

「ほう、フランス」

ペーターはフランスと聞いて目を楽しげに輝かせてきた。

「あの文化の国がか」

「とても性格の悪い国よ」

しかしマリーはフランスに対して不機嫌そのものの声で言うのだった。ロシアにとってはフランスはまさに西欧文化の中心地だがオランダにとっては高慢で鼻持ちならない嫌な奴でしかない。この当時フランスはオランダと何かにつけて対立もしていたのだ。

「何か私に声をかけてきて」

「ナンパかい？けしからん奴だ」

イワノフはそれを聞いて怒りを露わにしてきた。手に持っている木の杯に指が食い込む。

「フランス人は無類の女好きだとは聞いていたけれど」

「けれど何かおかしかったわ」

マリーはこうも言う。

「何かって？」

「誰かを探しているみたいなのよ。それに」

「それに？」

「ロシア大使も来ているわよ」

「えっ」

「何と」

二人のペーターはロシア大使という名前を聞いて同時に顔を顰めさせた。実は彼等にとってそのロシア大使とは鬼門以外の何者でもないのだ。

「ロシア大使も来ているのか」

「まずいことだ」

二人のイワノフはまたそれぞれの口で言うのだった。

「僕の身分が」

「わしの身分が」

危惧は同じものであったがそのの中身は違うものであった。

「ばれてしまうな。そうなれば」

「何かと厄介だな」

「この店にも来るかも知れないわよ」

「それ本当!？」

イワノフはマリーの今の言葉に警戒を露わにしてきた。見ればそれはペーターも同じであった。彼等は動作が異様なまでにシンクロしていた。それは名前故であろうか。

「いかにぞ、それでは」

ペーターはそれを聞いてすぐに立ち上がった。

「身を隠さなければ」

「うん、それじゃあ店の奥に」

イワノフがそう提案する。

「一時隠れよう」

「そうだな」

ペーターもそれに同意して頷く。

「すぐに隠れよう。それでいいな」

「ええ、それじゃあ」

「私も」

ここでマリーも一緒に隠れることを提案してきた。

「それでいいかしら」

「君もかい」

イワノフはそれを聞いて意外といった感じの顔を彼女に向けてきた。

「隠れるのは」

「さっき言ったじゃない。私もフランス人にナンパされたって」

「うん、まあ」

「それから逃げたいのよ。だからね」

「わかった、それでは」

何故かペーターがそれに頷いてから応えるのだった。

「すぐにそうしよう。三人でだ」

「あ、ああ」

「わかりました。それじゃあ」

こうして三人は店の奥に隠れた。そこへ何かやけに髭の濃い男が来た。

「あれ、あれは」

ペーターはその男の姿を見て呟く。

「ミハエルではないか。どうしてここに」

ロシアのオランダ大使である。見ればロシア風のやけに物々しい毛皮を着ている。その寒さに対する完璧なまでの装備は髭と共に彼がロシア人であることを見せていた。

「ふむ。ここにもいないか」

「閣下」

そこにまた一人髭の濃い男がやって来た。彼もロシア人であるのがわかる。格好でだ。

## 第四章

「こちらでしたか」

「うむ。何か最近この店にロシア人が来ているという噂があつてな」

「この店にですか」

「そうだ」

大使はそう部下に答える。

「だが今はいないな。今のところはかな」

「ふむ。それが陛下であればことすな」

「全くだ」

彼は部下の言葉に頷く。

「今は何かと不穏な時期だしな」

「不穏だと？」

ペーターはそれを聞いて目を動かす。

「ロシアで何かあるのか？」

「ホヴァンスキー公爵一派がまた色々と動いているしな」

「はい」

「彼等か」

ペーターはホヴァンスキーという名を聞くとその顔をすぐに顰めさせた。ホヴァンスキーとはロシアの大貴族で皇帝も無視できない程大きな力を持っていた。持っていたとは既に公爵はその主だった一族は皇室との争いで滅んでいたのである。今は残党しかない。しかし彼の家の存在は皇帝にとっては今も目の上のタンコブであったのだ。

「謀反を起こせば」

「大変なことになりますね」

「そうだったな。彼等がいた」

ペーターは顔を顰めさせてまた呟く。

「何時かは奇麗にしておかなければならないと思っていたが。どう

にもな」

「陛下はこの街におられるのですね」

「多分な」

大使はまた部下に答える。

「あの方は何にしる興味を持たれたことは自分で身に着けられる方だ。それならば欧州で最も造船技術の高いこの街に来られている筈だ」

「成程」

「さて、問題はだ」

「誰かおられるのですかな？」

ここにまた人が来た。見れば今度は洒落た西欧風の服を着たくすんだ茶髪に青い目のすらりとしていながらも何処か抜けた顔の男が来た。

「市長だ」

イワノフは彼の姿を見て呟く。

「やっぱりここまで来たのか」

「おや、これは」

市長は大使に気付いて彼に声をかける。

「どうしてこちらに」

「いえ、実はですな」

「ひょっとして皇帝陛下を探しておられるのですか？」

「何故それを」

大使は市長の言葉に目を顰めさせてきた。

「御存知なのですか？」

「いえ、もう国中の噂ですが」

市長は驚く大使に対して述べる。見ればその市長の後ろには中年の少しあだっぽくてそれでいて気の強そうな女がいた。大使は彼女の姿を認めて言う。

「造船所の所有者でしたな、確か」

「三日前にこの方と盛大に飲まれましたね」

「ええ、まあ」

大使はその言葉に答える。

「船乗り達と盛大に。いや、楽しかったですぞ」

「そのブローヴェ夫人です」

市長は彼女の名前を言う。

「当然御存知ですよね」

「まあ一応は」

「一応は、ですか」

「いやあ、何分かなり飲みましたから。オランダの酒もいいものですな」

「それはまあいいですが」

実はこれより少し前にオランダと結構色々あるイギリスで皇帝と従者達が僅か三ヶ月の大罪で邸宅を一つ破壊寸前に追いやっているのである。ロシア人の酒好きとその際の大暴れはオランダにも聞こえていたのである。

「しかし御名前程度は」

「まあまあ市長さん」

大使は強引に話をなかつたことにしようとしてきた。

「そんなことは仰らずに。陛下ですよね」

「はい」

話を強引になかつたことにされた市長は渋々ながら彼に応える。

「どうやらここにおられるようですが」

「ただ、誰なのがわからないのですよ」

「では私がヒントを与えましょう」

「ヒント!?!」

「はい」

大使はそう市長に言ってきた。

「というか手懸かりですね。陛下の御名前はピョートルです」

「それが何か」

「ですから。それをオランダ語読みして下さい」

大使はそう市長に言うのであった。

「どうなりますか？」

「ピョートルをオランダ語にするとですか」

「ええ」

「ピョートルですな。すると」

彼は考えながら呟く。何とか頭から言葉を捻る。

「ペーターですか」

「そう、ペーターです」

「ああ、そういえば」

ここで夫人は何かを思い出して言葉を述べてきた。

「政府から命令書が来ております」

「命令書が!？」

「はい、こちらです」

ここで命令書を市長に手渡す。市長はそれを受け取りながらいぶかしむ顔を彼女に向けて言った。

「これがあるのはいいですが」

「何か？」

「何故もつと早く出して頂けなかったのか」

「申し訳ありません、忘れていました」

かなり無責任な言葉であった。

「色々とありまして」

「はあ。それではまあ」

受け取った命令書を読む。見るとそこにはペーターという男が怪しいから見張れとあった。それは大使も読んでいてよく把握していたのだった。

「やはりペーターですか」

「けれど有り触れた名前ですよ」

市長は眉を顰めさせて大使に伝える。

「こんな名前は」

「オランダでもですか」

「そうです。ですから」

「怪しい者を見つけ出すのは容易ではない、そういうことですね」「残念ですが」

市長はそう大使に答える。しかしここで夫人が言ってきた。

## 第五章

「いえ、ロシア人ですよね」

「そうです」

大使が彼女に述べた。

「その通りです。私と同じ」

「その訛りで大柄で毛深いとなると」

「心当たりが？」

「あります」

夫人は真剣な顔で述べてきた。

「確かペーター・イワノフという男がいました」

彼女はそう二人に語った。

「名前もペーターでしかもロシア訛りで」

「それでは彼ですか」

「そうなる」と

大使と市長はそれを聞いて述べる。夫人はさらに付け加えてきた。

「しかも大柄で毛深いです」

「間違いないですな」

大使はそこまで聞いて納得したように頷いてきた。

「彼です」

「それではすぐにも」

「いや、お待ち下さい」

市長が動こうとするとすぐに大使がそれを止める。

「あまり手荒なことは」

「駄目だということですか」

「当然です。我がロシアの皇帝陛下ですぞ」

そう述べて市長を制止するのだ。

「卑しくもモスクワ大公であられビザンツ帝国の正統なる後継者であられます」

「だからですか」

「そうです。断じて手荒なことはなりません  
そう述べて制止するのであった。

「宜しいですね」

「わかりました。それでは」

市長は大使に止められて浮かない顔で彼に返す。

「ここは静かに」

「はい。そうして下さい」

「それでは細かいことはですね」

「何処へ？」

店を後にしようとする市長に対して声をかけた。

「はい。ここで話しては誰に聞かれるかわかったものではありません  
んからな」

「確かに」

既にかなり聞かれているがそんなことはどうでもいいようである。  
「それでは。私の家に来て下さい」

「わかりました。それではお酒と共に」

大使は何かついでに飲むつもり満々であった。市長はそんな彼に  
顔を顰めて返す。

「いえ、飲まれてはお話にならないでしょう」

「いやいや、話は深く酒を楽しんでこそです」

「そうなのですか？」

「ロシアではそうです」

かなり適当なことを述べる。どちらにしる飲みたいだけなのであ  
る。

「ですから。さあ」

「はあ」

そんなことを言い合って彼等は去る。それを見届けてペーター達  
も店を出る。そうしてイワノフとマリーは二人で何処かに行こうと  
した。ペーターはそんな二人に問うた。

「デートでもするのか」

「あのフランス人が何処にいるかわかったものじゃないしね」  
「イワノフは怪訝な顔でペーターにそう答える。」

「だから」

「わかったよ。それじゃあな」

「うん。じゃあ」

「ペーターさん、また」

「ではまた、お嬢さん」

ペーターは気品よくマリーにそう返す。

「それでは」

「うん、また」

こうして彼等は店の外で別れる。ペーターは一人になるがそこにまた一人やって来た。観ればやけに派手でみらびやかな貴族の服を着て金髪の鬘に化粧をして黒い目の顔をにやにやさせた男がやって来た。一目で何か何処の人間かわかりそうであった。

「おや、ここに」

彼は辺りを見回しながら気取った動作でペーターの側に来た。

「マドモアゼル」マリーがおられたのですが」

「マリーとは誰か知らないが一人のお嬢さんがあっちに行つたぞ」  
ペーターはそう言つてイワノフとマリーが行つた方の全く逆を指差した。

「あっちにな」

「そうなのか。ではあちらへ」

「うん。行つた方がいいな」

「しかし貴方は」

ここでフランス人はペーターについてあることに気付いた。

「どうにもこうにもフランス語がお上手で」

「そうかな」

「いえ、しかもその気品」

彼はここで持ち前の勘のよさを出してきた。どうやらペーターの

国の大使より余程外交官として優れているようである。フランスは外交が上手い国なのは伝統である。実に高慢で鼻持ちならず、敵もそれこそ世界中にいるが外交能力が高くて助かっている。

「貴方が皇帝陛下ですね」

「むっ」

ペーターはその言葉に目を鋭くさせてきた。

「ロシアの。違いますか？」

「そういう貴殿も只のフランス貴族ではないな」

「否定はしません」

彼もにこやかに笑ってペーターに返す。

「私はフランス大使シャトーヌフ。爵位は侯爵です」

「シャトーヌフ侯爵か。覚えておこう」

ペーターはそれを聞いて述べる。

「わしの心の中だけでな」

「では私も」

侯爵はペーターがこれを秘密にしておくとして申し出たのでそれに合わせてきた。

「そうしましょう。しかし」

「ここでは何だ」

話し合いの場を変えることにした。

「他で。じっくりとな」

「はい。それでは」

こうして二人は立ち去り酒場の前は誰もいなくなった。何やら面白そうに話が進んでいた。

それから数日後。夫人の息子が結婚したので船大工達と船乗り達が大きな酒場を借り切って盛大に飲み食いをしていた。宴である。

「いやあ全く」

「めでたいことで」

彼等はそう言い合いながら酒を楽しむ。その中にはペーターこと皇帝とイワノフもいる。皇帝は上機嫌で木の杯の中のワインやビー

ルを飲み焼肉を手で掴んで口の中に入れていた。それを見て誰も彼がロシアの皇帝であるとは思わない。

「夫人に乾杯！」

皇帝は上機嫌で杯を掲げる。

「その御子息にも乾杯しよう」

「そうだそうだ」

「ペーターさんもいいことを言うね」

「何であろうとも酒が飲めるのはいいことだ」

皇帝は上機嫌で仲間達にそう述べる。

「だからこそ皆も」

「そうだな」

「盛大に飲もう」

「マリー、君もな」

イワノフはここで隣の席に座っているマリーに声をかける。大柄で荒くれ者の男達の間で座っていた。

船に携わる者達が上機嫌でやっている。そこに海軍士官に変装したフランス大使がやって来た。その服装はやはりフランスのものであった。

「フランス軍か？」

「何に来たのかね」

「おお、皆さん楽しくやっておられますな」

侯爵は芝居がかった動作でいきなり言葉を発した。

「これはこれは」

「それはいいが」

「あなた、ここはオランダの船乗りの場所だぜ」

彼等は侯爵が化けている士官を不審な目で見ながら声をかけてきた。

## 第六章

「フランスの将校様がいるのはどうかと思うんだがな」

「贅沢なワインでもどうだい？」

「いやいや、あえてここに来たんだよ」

しかし彼はにこやかに笑って彼等に応える。応えながら皇帝をちらりと見る。

「君達と一緒に楽しくやりたくてね」

「俺達と!？」

「また酔狂だな、おい」

彼等はその言葉にいささか機嫌をよくした。入りたいというのなら彼等も悪い気はしない。

「それであんたビールはいいのかい？」

「安物のワインは」

「酒なら何でも」

彼は笑ってそう返す。

「当然美女もね」

「おっと、悪いですけど」

彼がマリーに顔を向けるとイワノフがすっと彼女の前に出て目を塞ぐ。

「彼女は僕の恋人ですのぞ」

「おや、そうなのですか」

「はい、ですから」

マリーを守る。大使はそれを見てここでは船大工達に混ざって飲みはじめた。そんなことをしていると今度は市長がオランダ軍の艦長の服で来た。もう一人いるがどうにもキザな口髭で折り目正しい動作の若い男であった。侯爵は彼の姿を認めて嫌な顔で呟いた。

「ローズ伯爵」

イギリス大使である。言うまでもなく彼のライバルだ。

「一体何の用だ、こんなところに」

「市長、いえ艦長」

オランダ軍将校の服の伯爵は小声で市長に問うていた。

「何かフランス大使もいますか」

「あれ、何処に」

「何処につて。お気付きになれませんか？」

あらためて市長の鈍さに呆れる。しかし口には出さない。

「まあいいです。それよりですね」

「はい」

「随分賑やかになっていきますね」

「結構なことですよ」

市長は至つて暢気なままだ。今何が起ころうとしているのかにも気付いてはいないのだ。

「賑やかならば」

「いえ、そうではないですね」

市長の鈍さに内心とんでもないものを感じてはいるがやはり言わない。それは市長への気遣いではなくイギリスとしての考えであった。オランダとイギリスは以前より微妙な関係にあるのであえて親切やそうしたものを避けているのである。

「いいでしょう。それでは私は」

「どちらへ」

「宴の中へ」

すつと船乗り達の中に入る。

「さあ貴方も」

「それでは」

「来たか」

フランス大使である侯爵は彼等の姿を見て一人呟く。

「どうやら。彼等も情報収集をするつもりらしいな」

「そのようだな」

彼に皇帝が囁いてきた。

「まあわしは何もしないので」

「左様ですか」

「卿等でやってくれ。それではな」

「はい。それでは」

皇帝から離れてイギリス大使を警戒しながら飲む。その中でも何かと火花が散る。すると今度はロシア大使がそのまま来たのであった。

「いや、全く以って楽しそうだ」

ロシア訛りのオランダ語をそのままにして服は船長らしきものに着ただけだ。あまりにも下手な変装で皇帝も思わず酒を嘔いてしまった。

「どうしたんだい、一体」

「いや、何も」

慌てて仲間の船大工に返す。

「何もないけれど。ただ」

「また変な船長が来たな」

「ああ、全くだ」

自分の国の大使に呆れながら答える。

「何処の船の人なのかね」

「さてね。それはわからないが」

「飲みたくて来たただけだろうな、あれは」

「殆どはそうだな」

彼の顔を見ただけでそれはわかる。本当に酒を飲みたくて仕方がないように辺りを見回しているからだ。

「殆どは、かい」

「ひよっとしたら全部かもな」

早速飲みはじめた大使を見て述べる。

「まあ彼はいいとしてだ」

「うん」

「飲むか」

「飲もう」

そう話して飲みだす。するとそこに夫人がやって来た。そして威勢良く船乗りや船大工。こっそりと身分を隠している面々にも言うのだった。

「皆、飲んでくれてるんだね」

「ああ、奥さん」

「盛大にな」

船乗りも一緒になっている市長や大使達もそれに応える。

「元気にやってるぜ」

「今日は有り難う」

「さあ、どんどん飲んでね」

夫人はまた彼等に言う。

「お酒も食べ物もまだまだあるからね」

「よしっ」

「じゃあ今度は奥さんから俺達にだ」

「何かあるの？」

夫人は上機嫌の彼等に笑顔で応える。

「あるさ」

「俺達から奥さんへの贈り物、それは」

それぞれ席を立つ。そうして言うのだった。

「歌に踊りだ」

「それでいいかな」

「ええ、喜んで」

夫人は笑顔でそれに応える。

「それなら見せてもらっていいわね」

「おうよ」

「じゃあはじめるか」

「さて、それではわしも」

仲間達が席を立ち踊りの用意をするのを見て皇帝も立ち上がった。  
「踊るとするか」

「あんたも踊るのかい」

「ああ」

にこりと笑ってイワノフに答える。

「こういう時に踊るのがな。一番楽しいしな」

「見たところダンスも上手そうだね」

「まあ経験はある」

宮廷のダンスのことだ。しかし彼はどちらかというところうした場でのどんちゃんした踊りや唄が好きなのだ。それが彼の好みであった。

「あんたはどうするんだい？」

「マリー、一緒にいいかな」

「ええ」

マリーはイワノフに声をかけられにこりと笑ってきた。

「それじゃあ御願いな」

「うん。それじゃあ」

二人も席を立つ。そうして踊りをはじめようとした時に今度はオランダ海軍の軍服を着た将校がやって来た。また誰かの変装かというところではなかった。

「達する！」

踊りをはじめようとした一同を止めてから言った。そうして懐から白い紙を取り出して自分の前に広げてから高々と述べるのであった。

「我がオランダ政府からの通達である！」

「通達？」

「何だ一体」

船乗りも船大工もそれを聞いて顔を将校に向ける。市長や大使も。

## 第七章

「このところ非合法に入国してきた不貞外国人の破廉恥行為が目立つ！よってこの度彼等を一齐に検挙するものである！」

「というところの中にいるのもかい？」

「そつだ？」

夫人に答える。

「だから私がここに来た！覚悟するがいい！」

「待て、待て」

ここでイギリス海軍艦長の服を来た市長が出て来た。見ればもう酩酊寸前で足元までふらふらしている。どうやら僅かの間に相当飲んだらしい。

「それには及ばぬ」

「御言葉ですが貴国には関係ないことですが」

「それが関係あるのだ」

そつ自国の将校に返す。

「これがな」

「それは何故ですか？」

「それはな」

ここで帽子やらつけ髭やら鬘やらを外す。そうして本来の顔に戻る。

「私がこの街の市長だからだ」

「何故そのような御姿に？」

生真面目な将校は彼の突然の出現に目を顰めさせながら尋ねた。

「何かの御趣味ですか？」

「何でそうなるのだ、わしも探していたのは」

「密入国者をですか」

「そつだ。それでは私自ら見つけよつ」

そつ言つて広間の中を見回す。そうしてまずはフランス大使と口

シア大使を引き出してきた。

「この二人が怪しいな」

「怪しいも何も」

「軍服と格好でわからないかね」

船乗り達も船大工達も前に出て来た二人を見て囁き合つ。

「かなり酔つてるしな」

「前から結構ぼんくらだったし」

「そうして次は」

今度はついさっきまで話をしていたイギリス大使を出してきた。

「この男だ」

「御冗談を」

イギリス大使は前に引き出されて思いきり顔を顰めさせていた。そうして市長に言うのだ。

「さっきまで御一緒だったではないですか。それがどうして」

「ええい、私の目は誤魔化せぬ」

だが酔っている市長にはそんな言葉は耳に入らない。それどころかさらに興奮するのだった。

「その証拠にその軍服は」

「誇り高きロイヤル・ネービーの軍服です」

伯爵は毅然として答える。

「これが何よりの証拠ではないのですか？」

「ふん」

その言葉にオランダ海軍の将校達は露骨にあざけりの目を向けてきた。

「海賊風情が」

「何っ!？」

「何を偉そうに。威張れたことではありませんまい」

「それはそちらも同じでしょう」

市長は何時の間にかイギリス人になりきっていた。ところが。  
「もつとも我がオランダは」

「我が!？」

完全な失言であった。身元を自分でばらしてしまった。

「貴方はオランダ人ですか」

「ならそれは変装で」

「あつ、いや」

自分の失言に気付いてあたふたとしだすがもう遅かった。忽ちのうちに窮地に陥る。

「これはですな。その」

「しかし貴方は今」

「確かに我がオランダと」

周りの船乗り達も大工達も市長に言う。

「仰いましたか」

「しかも貴方の顔は」

遂に誰かさえもわかった。

「市長ではないですか」

「何でまたイギリス人に化けて」

「あつ、いやこれは」

周りの者達の突っ込みにあたふたとしだす。そうして次第に苦し紛れになつてきた。

「これはだな。つまり」

「また変なこと考えてるんですか？」

「ここは静かにですね」

市長の人望がわかる言葉であった。この市長は今一つ頼りないし頭もあれだという評価が一般的なのだ。そしてその評価は正解であった。

「して頂けると有り難いですが」

「ささ、お酒でも」

「ええい、そんなのはいらぬ!」

遂に切れてきた。頭がよくななくても市長だ。ということは権限がある。その権限をあてずっぽうに使いだしてきた。ただし本人はこ

れが切り札だと考えているのだった。

「皆逮捕だ！」

「何っ!?!」

「また変なこと言い出したぞ！」

周りの者達は切れてしまった市長に呆れて言い出した。何処までも低い評価の市長であった。

「私もか？」

「私も」

「無論！」

他国の大使達にまで言う始末であった。勿論後々の外交問題なぞ考えもしていない。よくぞこれで市長にまでなったものである。これも周囲の正当な評価である。

「皆捕まえてしまえ！」

「いや、お待ち下さい」

ここで皇帝が出て来た。あまりの有様を咎めてのことである。

「もう少し落ち着かれて」

「私は落ち着いている！」

本人しか思っていない発言であった。

「まずは御前からだ！逮捕する！」

「駄目だこれは」

自分に向かつて来た市長を見て遂に匙を投げた。

「話にならない。これでは仕方がない」

「逮捕だ、逮捕！」

「御免っ」

飛び掛ってきた市長を捕まえた。そうして思い切り投げ飛ばしてしまった。

「う、うわああああっ！」

市長はそのまま水瓶の中に頭から突っ込んだ。流石に大男である皇帝が相手では市長の相手にはならなかった。無謀と言えば無謀であった。

市長は水瓶の中で気絶していた。皇帝はそんな彼を見下ろして言う。

「まずはこれで終わりだな」

「終わりだよなあ」

「まあ今の話はなかったことで」

すぐに市長の命令は消された。あまりにも滅茶苦茶だったのでなかつたことにされたのだった。皆とりあえずまだ混乱していたが大使達も帰りその場は収まった。皆で気絶した市長を水瓶ごと庁舎に連れて行きその場は終わったのであった。一人を除いて。

## 第八章

その市長が連れて行かれたザールダム市庁。当然ながら彼の公舎でもある。彼はその自室で毛布にくるまりながら自分の椅子に座って考えごとをしていた。鼻をぐずぐずといわせて不機嫌な顔を見せている。水瓶の中にいたので風邪をひいたのだ。部屋の中は市長のものだけあって中々豪華だ。椅子もがっしりとしていて黒く装飾まである。机もペンも奇麗に整えられていた。彼はそこで不機嫌な顔で座っているのであった。

「そもそもだ」

彼は自分のことを棚にあげて考えていた。

「皇帝が問題なのだ」

そう結論づける。

「皇帝がこの街にいることが問題なのだ。それだけが問題だ」

という考えに至った。すると呼び鈴を鳴らして人を呼んだ。するとすぐに当直の役人が部屋の中に入って来た。彼は部屋に入ると一礼して市長に問うてきた。

「御呼びでしょうか」

「用があるから呼んだのだ」

いささか能力を問われかねない返事を返した。

「いいか」

「はい」

役人は市長に応える。表情は消している。

「皇帝を歓迎する」

「皇帝といえますとやはり」

「そうだ、噂のだ」

役人の顔を見て言葉を返す。鼻の調子が悪く声が悪い。

「ロシア皇帝をだ。いいな」

「誰かおわかりなのですね」

「うむ」

なお役人は市長の予想を信じてはいない。しかしそれは顔には出さない。

「私にはわかった。完全にな」

「はあ」

「あとは歓迎準備だけだ」

自分の主観に基いて話をしてきた。

「皇帝陛下のだ。いいな」

「わかりました。それでは最上級の歓迎準備を」

「頼むぞ。至急にな」

「はい、それでは」

「うむ、頼むぞ」

こうして市長は彼なりに皇帝への対応を進めていた。このことはすぐに街中に伝わり噂になった。船乗りや大工達もその話をしだしていた。

「ああ、やっぱりいたんだな」

「そうだな」

彼等は仕事の間にそう話をしていた。

「ロシアの皇帝がねえ」

「いやいや、中々面白い話だな」

笑いながらハンマーや釘を手にして話に興じる。そこには皇帝もイワノフもいる。だが彼等はこちらでは表情を消して話を黙って聞いていた。

「皇帝陛下が俺達の中に」

「となると誰かな」

「ロシアからの奴だろ」

すぐにそう見当がつけられてきた。これは当然の流れであった。

「やっぱり」

「けれど自分で名乗られたりはしないよな」

これも同じようにすぐに言われた。

「お忍びで来られてるんだし」

「そうだな。じゃあ簡単にはわからないか」

「それにあれだぜ」

また言われた。

「皇帝陛下だしな。失礼がないように」

「そうだな」

皆ここでは真剣な顔になる。流石に皇帝となつては無碍にはできない。

「誰か探るような真似はな」

「謹んでおくか」

まずは誰かは詮索しないことになった。だが疑わしい人間についてはそれぞれ考えが巡らされる。当然ながらロシア人達が疑われる。その中にはイワノフもいたのだった。

イワノフが皇帝かも知れない、そう考える者もいる。その中には彼の恋人であるマリーもいた。彼女はこのことに胸の中に深い不安を抱いていたのであった。

「困ったわ」

彼女はこの時夜の酒場への道を歩いていた。酒場にはイワノフがいる、丁度その彼に会いに行くところであったのだ。不安げな顔で俯いて道を歩いていた。

「もしそうだったらどうしましょう」

その不安げな顔で呟く。

「イワノフが皇帝だったら。私なんかじゃとて」

庶民がロシア皇帝と結婚できるかどうか、それは彼女でもわかることであった。だからこそ悩んで苦しんでいるのである。俯いて顔を上げられはしなかった。

「結婚なんて。本当にそうだったら」

「もし」

その彼女に声をかける者が来た。見ればそれはペーター、本当の皇帝であった。

「どうしたのですかな、娘さん」

「貴方は」

「ペーターです」

顔をあげて尋ねたマリイに対して落ち着いた笑顔で答えてみせた。見ればそれだけで人を安心させる何かがある顔であった。

「そうでした、ペーターさんでしたね」

「はい。ところで」どうされました？」

不安げな彼女の顔を見て問う。

「お困りのようですが」

「いえ、別に」

顔を背ける。そうして一旦は否定しようとした。

「何もありません」

「そうは見えませんが」

皇帝はそんな彼女に対して言った。

「そうでしょうか」

「はい。まさか」

ここでふと勘が閃いた。彼女が何を考えて何を悩んでいるかわかったのだ。

「イワノフ君のことですね」

「おわかりなんですか」

「ええ、何となく」

落ち着いた優しい笑顔のまま答える。彼女を安心させる為にあえてこつした笑顔になっている。意外な程気配りも効かせていた。

「やはりそうですか」

「あの、皇帝陛下がいらしてるんですよね」

「あっ、噂の」

あえて自分のことは惚けてみせた。目を見れば芝居だとわかるような演技であったが深刻に悩んでいるマリイには見えないものであった。

「ロシアの皇帝ですか」

「イワノフはロシアから来ているんです」

マリーはまた俯いてしまった。そのうえで皇帝本人に述べる。彼とは気付かずに。

「若しかしたら彼が」

「いえ、それはないです」

皇帝はマリーのその言葉をすぐに否定してきた。

## 第九章

「彼は皇帝ではありませんよ、絶対に」

「本当ですか!？」

「はい」

驚いた顔を見上げて尋ねるマリーにその笑顔で述べる。

「それは私が保証します」

「そうですか。けれどどうしてそれを御存知なのでしょう」

「さる理由で」

あまり上手とは言えない言葉で答えた。

「私だけがそれを確実に知っているのです」

「確実に!？」

「そう、確実に」

また笑顔で述べた。

「ですから御安心を」

「そうなのですか、皇帝じゃないんですね」

それを聞いていささか気が楽になった。顔にもそれが出ていて安堵したものになっていた。それは皇帝にもマリー本人にもよくわかるものであった。

「よかった。それなら」

「ただしです」

皇帝はここで真顔になってマリーに声をかけてきた。

「はい?」

「暫くの間は彼を皇帝をして扱えばいいかと」

そう提案してきた。

「彼をね。皇帝として」

「どうしてですか?」

「その方が私にとって都合がいいからです」

何気に失言をしてしまった。自分でもそれを気付いて困った顔に

なつてしまつ。

「貴方に？」

「いや、何でも」

苦笑いを浮かべてすぐにその言葉を消した。

「何でもありません。御気になさらずに」

「はあ」

「それですね」

何とかその場を取り繕つて話を再会させる。

「貴女は何も心配することはありません」

「何もですか」

「そうです。彼が好きなのです」

それまでの穏やかな笑顔に戻つてマリーに尋ねる。 80

「イワノフ君が」

「はい」

マリーは顔を赤らめさせながらも真顔で答えた。小柄な彼女の顔は大柄な皇帝からは見えにくかつたがそれでもその気持ちははっきりと伝わつた。

「そうです。できれば彼と」

「生涯添い遂げたい」

「それができるのなら死んでもいいです」

顔を真っ赤にさせたまま素直に述べる。

「イワノフだけが。私の全てですから」

「そこまで彼を愛しておられるのですか」

皇帝はそれを聞いて心打たれた。そうして親切以上のものをこの少女と彼女が愛する若者に対して与えねばならないと心に誓つたのであつた。

「それではですね」

その誓いのままにマリーに言う。

「マリーさん」

「ええ」

また顔をあげて皇帝に応える。

「私に考えがあります」

「御考えが？」

「そうです。私が貴女とイワノフ君を幸せにしてみせましょう」

真剣な顔でマリーに言う。マリーは気付いてはいなかったがそれは完全に皇帝の顔になっていた。

「きつと」

「どうやって」

「ですからそれにはまずイワノフ君を皇帝として扱うのです」

またそれを述べた。

「宜しいですね、全てはそれからです」

「それからですか」

「ええ。きつとです」

念を押して言う。

「きつと。それさえ守って頂ければ」

「イワノフは私のものに」

「そうです。ですから貴女は何も心配する必要はありません」

またマリーを安心させてきた。

「必ず貴女は幸せになりますので」

「幸せに」

「そうです」

不思議なまでに説得力のある言葉であった。それは言葉を出している彼がその皇帝自身であるからに他ならないからであるがマリーはそれを知らない。ただそれに導かれるだけであった。

「ですから。よいですね」

「わかりました」

憂いの消えた顔と声で答えた。

「それでは私は。このまま」

「そうです」

またその説得力に満ちた力強い言葉を出してみせた。

「ですから。宜しいですね」  
「ええ」

マリーは笑顔で頷く。もう迷いはない。  
「わかりました。それではイワノフを皇帝として」

「そうです、それだけでいいので」

「はい、それでは御願いますね」

「ええ、また」

二人は笑顔で別れた。皇帝は一人道に残って意気揚々と酒場に向かうマリーを見て寂しい笑みになった。そうして一人ぼつりと呟くのであった。

「いいものだな」

寂しい笑いと共の言葉だった。

「愛し合うというのは。私も」

ふと自身の国のことを想う。そこにいる者達も。

皇帝は寂しさを抱いて立ち去った。そうしてそこからまた幕が開けるのだった。

イワノフは酒場に入る。すると場が一変した。

「やあ、これはこれは」

「皇帝陛下、ようこそ」

「えっ、皇帝!？」

驚いたのはイワノフだった。その顔で周りに集まってきた皆に対して言う。

「僕が………かい!？」

「そうですよ」

「隠しているなんて」

彼等はイワノフがまだ演技をしていると思っている。実際にイワノフは演技が下手な方であるがこの場合はどうにもそれが微妙に彼の立場を立たせてしまっていた。

「恥ずかしくないで」

「そんな必要ないですから」

「ちね」

そうして杯が出される。

「まずは一杯」

「どうぞどうぞ」

「はあ」

言われるがまま杯を受け取る。そこには黒ビールがなみなみと注がれていた。

「このビールは」

「オランダの酒です」

船大工の一人が恭しい礼と共に述べてきた。

「オランダの？」

「そう、最も美味しい酒です」

今度は船乗りの一人がやはり恭しい礼と共に述べるのだった。

「私共の間では」

「おい、こちら」

えらく恰幅のいい初老の男がここで出て来た。

「あつ、船長」

「こんな酒出すなよな」

そう言って黒ビールを取り上げる。イワノフ、彼等が思っている皇帝から。

「あつ、ちょっと」

「宜しいですか、陛下」

ビールを差し出した船乗りの頭にハンマーのような拳骨を浴びせながらイワノフに謝る。随分と野太く潮でしわがれてしまった声でだ。

「こんなものを飲んではいけません」

「えっ、けれど」

「皇帝陛下なのですよね」

そうイワノフに問う。

「まあそうだけれど」

「ならこんなのを飲まずにさあ」

後ろから巨大なボトルを出してきた。樽と見間違う程だ。

「これで」

「あの、これは」

そのボトルの巨大さに戸惑いながら船長に尋ねる。

「何でしょうか。いや」

彼もその気になってきた。それで口調を自分でも変えたのだった。

「何かな」

胸を張って偉そうに尋ねる。その演技が如何にも下手な喜劇の大根役者なのであるがやはりそれに気付く者は酒場にはいはしなかったのだった。

「ワインです」

「ワインとな」

「それもフランスの」

「ほう」

それを聞いて思わず目が輝いた。実は彼も酒は好きな方だ。それを隠すつもりは自分にもない。ましてやフランスのワインとなるとだ。自然に出てしまっていた。

「フランスのワインか」

「如何ですから」

巨大なそれをイワノフの前に差し出してきた。

「これで思いきり」

「そうだな」

鷹揚に応える。臭い芝居で。

「では貰おうか」

「はい、それでは」

杯にワインが注がれる。気付くと横にマリーが来ていた。やはり恭しい仕草で彼にかしずいていた。もうその態度だけで何なのかわかる程であった。

## 第十章

「マリー」

「ささ、陛下」

その杯を手に取ってイワノフに勧める。

「どうぞ一杯」

「うむ、御苦労」

マリーから尊大ぶって受け取る。

「ではもらうとしよう」

「有り難き幸せ」

(しかし。どういふことなんだろう)

周りの声の中杯を飲みながら考える。

(急に周りが。これは一体)

酒を派手に飲みながら考えている。その時であった。

「いや、困ったことになった」

本物の皇帝がここで困った顔をして入って来た。彼の場合は芝居ではない。一応船乗りを演じてはいるがここでは芝居をしてはいなかった。

「さて、どうしたものか」

「おや、どうしたのかね」

皇帝気分のイワノフは慈悲を見せる素振りで皇帝、ピーターに声をかけた。その右手には杯がある。もうワインは空になったがそこにまた派手に注がれる。注がれ過ぎて杯からあふれ出て零れ出てしまっている程である。

「困っているようだ」

「そう、困っています」

本物の皇帝はこう言葉を返した。本当に困った顔で。

「どうしたものかと」

「何か起こったのかい？」

「港が全て封鎖されまして」

「港が!？」

イワノフはそれを聞いて眉を顰めさせてきた。

「それはまたどうして」

「ああ、それはあれですね」

それを聞いてそこに居合わせたイギリス公使が声を出してきた。

まだ変装のままだ。

「とつくにばれてるのに」

「まだ脱がないんだな」

「いやいや、これも男伊達」

イギリス男はオランダ男の悪口には負けないのだと顔に出して船乗り達に応える。

「どうです? 格好いいでしょう」

「そうかな」

「何かあれだよな」

オランダ男も負けてはいない。粗捜しをしてケチをつけにかかってきた。

「どうにも」

「これは」

「おやおや、このよさがわからんとは勿体ない」

軽く受け流す。それからそっとイワノフが化けている皇帝に声をかけてきた。

「陛下」

「うむ」

この公使も気付いてはいない。

「お困りのようでしたら私が力添えさせて頂きましょう」

「貴殿がかい？」

必死に高貴な言葉を探して出した。つたないオランダ語で。

「はい。実はヨットに空きがあります」

「イギリスのヨットにかい」

「そうです。宜しければそれをお使い下さい」  
「そうだな」

イワノフは顎に手を当てて考える顔をした。そうして芝居をして言うのだった。

「それだつたらだね」

皇帝に顔を向けて言う。

「ペーター君」

「はい」

皇帝が皇帝にかしづく。本物も偽者もお互い内心で楽しみながら。もつともイワノフは完全に顔に出てしまっているが。

「よければだね。今ヨットを提供してもらったから」

「ええ」

「それで帰ることにしよう。私と一緒に」

「陛下とですか」

（しめた）

皇帝は心の中でまた会心の笑みを浮かべる。彼にとって実に好都合なことであった。

（これで帰られる。運が向いてきたな）

「字は読めたかな」

イワノフは皇帝に問うた。この時代文字が読める者なぞそうはいはしない。船乗り達で読める者は殆どいなかった。実はイワノフは読めるのだ。

「字ですか」

「左様。どうか」

「ええ、まあ」

皇帝はすぐに答えた。ここでは素直に答えたのだ。

「一通りは」

「ならいい」

イワノフは彼の返答を聞いて満足気に答えた。それこそ彼が望んでいた返答だったのだ。

「君は私の秘書だ」

「秘書ですか」

「秘書としてロシアに連れて行ってあげよう。それでいいね」

「有り難き幸せ」

(ふむ、ならばいい機会だな)

偽の皇帝の側にいられることに機会を見た。ここで彼は動いた。

(ここで)

「あの」

恭しくイワノフに声をあげる。大きな身体を二つに折って。

「何かな」

「実はこれをですね」

懐から何かを出してきた。それは一枚の封書であった。

「これは？」

「後でお開け下さい」

そう彼に耳打ちする。

「宜しいですね」

「この手紙をか」

「そうです」

また彼に告げる。

「そうすれば幸せになれますので」

「それはいい」

いい気分のところどころでさらにこう言われて。イワノフは天にも登らんばかりの気持ちになった。それは晴れやかな表情ですぐにわかった。

「幸せがまた。じゃあ」

「ただしですね」

何か今にも開けようとするのを見てそつと忠告する。

「んっ！？何かな」

「今は開けないで下さい」

耳元で告げた。

「いいですね。ヨットが港に出た時に」

「ヨットがか」

「そうです、今イギリス公使から頂いたヨットです」

既に彼の頭の中ではこれからの流れが完全にできてきていた。後はそれを忠実になぞるだけである。それにイワノフも入れたのである。

## 第十一章

「あれをか」

「今から港に出しますのね。私が用意してきます」

「君がか」

「そうです。今から」

そう注げて離れる。

「すぐにオランダからロシアに帰りましょう」

「うむ、そうだな」

また鷹揚に皇帝に応える。芝居は下手だが板についてきた。

「それでは頼む。すぐにな」

「了解です。では」

皇帝はすつと姿を消した。そのまま店を出て行ってしまった。

「もうすぐなんだなあ」

去った皇帝を見て一人呟く。ロシアに帰られることに郷愁を感じていた。同時に逃げ出したことへの処罰についても考えた。

だがそちらの方はすぐに消えた。それは皇帝になったことで誤魔化せると思つたからだ。有頂天になっているせいかなり考えが甘くなっていた。

「ロシアか。皆どうしているかな」

家族や友人のことを考える。その後でマリーを見る。

「マリーと。結婚できればこれで最高だな」

「やあやあ、ここにおられましたな」

また誰かがやって来た。見れば市長がオランダの可愛らしい民族衣装を着た娘達を連れている。他にはブローヴェ夫人や市会議員達もいる。

「しかしなあ」

「何でまた」

夫人や議員達は市長の後ろでヒソヒソと話をしていた。どうにも

いぶかしみ腑に落ちない顔をしている。

「市長は急にまた」

「皇帝陛下の祝賀をされるのか」

「ゴマスリだろ」

議員の一人から身も蓋もない言葉が出て来た。

「どうせ。だから娘達を急に集めて」

「やれやれ、そんなことをするくらいなら」

別の議員がぼやく。

「書類の山をな」

「片付けてもらわないと」

早く仕事をして欲しいというのだ。だがそんな言葉は当の市長の耳には入らず彼は恭しく偽の皇帝に一礼して必死に機嫌を取っていた。

「いやいや、さあさあ」

市長はイワノフに対して言っていた。

「お酒に御馳走に美女に」

「美女はだな」

イワノフは酒と馳走は受けたが最後は受けようとはしなかった。

「宜しいのですか？」

「それは一人だけでいいのだ」

マリーをチラリと見て言う。当然市長はその目に気付きはしない。

「一人とは？」

「うむ」

またマリーを見る。それから言おうとする。

「それは」

「それは」

いよいよ言葉が発せられる。その時だった。

港の方からであった。突然大砲が鳴った。

「何だ！？」

「大砲が！？」

船乗り達も議員達も驚きの声をあげる。慌てて外に出ると大騒ぎとなっていた。

「何だ、どうしたんだ」

「港が急に。この騒ぎは」

「大変だ、大変だ！」

港の役人が酒場から出て来た一同に対して告げる。慌てて肩で息をしている。

「どうしたのだ、一体」

「港の封鎖が解かれました！」

彼は市長に対して答える。それを聞いた市長は目を丸くさせる。

「そんな筈がない、私はそんな命令を出してはいないぞ」

「市長の命令ではありません！」

「何っ!？」

また驚く。

「私ではない。だとすると」

「まさか」

うるたえる彼を見て議員達はまた声を立てる。眉を顰めさせてヒソヒソと話をしている。

「また命令を忘れたのかな、市長は」

「そうかもな。全くよくもまあこれで」

「皇帝陛下の御命令です」

「なっ!？」

市長だけではない。イワノフもこの言葉には目を丸くさせた。

「私が………馬鹿な」

「一体どうしたことなんだ」

「ヨットに皇帝陛下が乗っておられていました」

役人がここで言った。

「ロシアの皇帝陛下が」

「馬鹿なっ」

今度はそこにいる全員が驚く。目を丸くさせてもう何が何なのか

わからない。

「陛下は「こちらに」

「そんな筈が」

「いえ、本当に」

役人が指差したそこに。何とヨットが出ていた。

## 第十二章

その艦首に彼はいた。皇帝の豪華な衣を身に纏いそこにいたのだ。  
「あれはまさしく」

その衣を見て誰もがわかった。彼こそが真の皇帝であると。

「ロシア皇帝陛下」

「ピョートル二世」

「馬鹿な、こんなことってあるのか」

イワノフは顎を地に落とさんばかりに広げ呆然としていた。

「ペーターが皇帝だったなんて。そんな」

「イワノフ」

その皇帝が今艦首からイワノフに声をかけてきた。

「は、はい」

「先程渡した封書を開けてくれ」

「こ、これですか」

慌てて思い出す。先程皇帝自身から貰った封書を。よく見ればかなり立派な紙の封書だ。

「そう。そこに書いてある文字を読んで欲しいのだ」

「私への死刑執行の言葉でしょうか」

「ははは、それはないさ」

それは笑って否定された。皇帝には最初からそんなつもりはなかった。

「間違ってもそうじゃない。安心してくれ」

「では一体」

「だから呼んで欲しいんだよ」

笑ってまた彼に告げる。

「君自身でね。いいかな」

「はあ」

「では呼んで欲しい」

「私が」

「そう。早く」

読むように急かす。表情を見ればやはりにこにここと笑っている。まるで何かを楽しむようにだ。

イワノフはそれを受けて封を開いた。そうして書類を出して中身を読みはじめた。

「ええと」

「何て書いてあるんだ？」

「といつても。何書いてるかわからねえや」

船乗り達の見たこともない文字だった。元々文字が読めない彼等だがその彼等がはじめて見る文字だったのだ。それはロシアのキリル文字だった。

「ふむ。やはりわからないか」

そのことは皇帝からも見えていた。聞いて考える顔になる。

「それでは言葉や文字も考えておこう」

後にロシアでの宮廷での言葉はフランス語になっていく。それはこの皇帝の時代からはじまるのであるがこの時に気付いたことである。

「ふむふむ」

「何て書いてあるの？」

横からマリーが覗き込んでイワノフに尋ねる。

「よかつたら教えて」

「僕をロシア帝室監督長にしてくれるそうだ」

「えっ、帝室の！？」

「それは凄い」

「君の人柄を見てのことだよ」

皇帝はにこやかな声と顔でイワノフに告げた。

「僕のですか」

「そう。それに今回は君のおかげで上手くいったしね。そして」

「そして？」

「さらに読んで欲しい」

書類をさらに読むように勧める。

「もう一ついいことが書いてあるからね」

「もう一つですか」

「おっ、わかったぞ」

不意に市長が何かに気付いたかのように顔をあげて素っ頓狂なま  
でにかん高い声をあげてきた。皆何事かと彼に視線を集める。

「あれですな」

「何でしょうか」

皇帝は少し目をパチクリさせて彼に問うた。

「この街への大規模な経済援助ですな」

「いえ、違います」

それはすぐに否定された。

「残念ですが」

「何と、違うのですか」

「当然だよな」

「全くだ」

自分に都合のいいことを妄想する市長に議員達はまた呆れ顔にな  
って溜息をついた。

「何処をどうやったらそんな勝手な発想が」

「そんなのだからこの街は」

「しかしですな」

ここで皇帝の言葉は意外な方向に転んだ。

「貴方にも関係はあります」

「私に？」

「そうです」

にこにここと笑って彼に告げる。これからのことを楽しむかのよう  
に。

「一体どんな関係が」

「さあ監督長」

イワノフに声をかけた。

「どんだん読んでくれ給え」

「はい。ええと」

皇帝に言われてさらに読む。するとそこに書かれているのは。

「市長の妹マリーをイワノフの妻とする………」

「えっ!？」

「私とイワノフが」

皆もマリーもまたしても驚いた。とりわけ当の本人達と市長は。

「あ、あの陛下」

「これはまことですか!？」

「私は幸せなことでは嘘は言わないのだよ」

皇帝は大きな声で笑ってから答えた。その気品のある顔立ちや風貌からは想像できないガラッパチな笑いであった。しかしどうにも妙に様になっていた。

「そうなのですか」

「そう。だから監督長、マリーさん」

「はい」

二人は畏まって皇帝に顔を向ける。

「これから末長く幸せにな」

「有り難き幸せ」

「慎んで」

「しかし何とまあ」

皆これまでのことで驚きを隠せない。楽しいやら呆然とするやらどうにも狐につままれたような顔になってしまっていた。皇帝はその彼等に対してさらに告げるのであった。

「そして皆さん」

「陛下、何か」

「私はこれでロシアに帰ります」

「祖国にですか」

「そう、愛する祖国へ」

望郷の笑みが浮かび上がった。その笑みをたたえて皆に告げる。

「今から帰ります。ですが」

「ですが？」

「ここでのことは生涯に渡って忘れません」

望郷の念はロシアに対してだけではなかったのだ。この港町に対しても。彼にとっては忘れられない素晴らしい場所となっていたのである。

「皆さんと船大工として共に過ごした日々は決して」

「覚えていて下さるのですね」

「ええ、これからもずっと」

後ろにロシアの船達が現われる。それをバックにして述べる。

「永遠に」

「何と有り難い」

「では我々もまた」

「覚えて下さるのですか」

これは皇帝にとっては思わぬ言葉であった。彼等にも覚えてもらえるとは。

「当然です」

「我等と共に笑い、楽しまれた陛下を」

実際に彼はここでの生活をかなり楽しんでた。彼等もそれを知っているからこそあえて言うのだ。

「どうして忘れることができましょう」

「だからこそ」

「ええ。心地よい別れを」

大砲が鳴り船は去っていく。皇帝は何時までも港の方に顔を向けて笑っていた。イワノフもマリーも船乗り達も市長も議員達もこの風変わりな皇帝を見送り彼を讃える言葉を捧げていた。

船大工

2  
0  
7  
・  
8  
・  
3  
1

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9635c/>

---

船大工

2008年8月13日22時50分発行